



「片付け」という病

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

れたのでしよう。

▼しかし、自分の家や部屋を片付けるのは、あくまでも当人だけに許された特権です。

「片付け」とは、自らの責任において自ら所有するものを取捨選択し、残すべきものをしかるべき場所に配置する行為です。取捨がつかない状況に陥った時には、他人の意見や手助けを求めるかもしれませんが、あくまでもその主体は本人であり、それを手放すことは自らの人格の放棄にほかなりません。

▼「片付け」に関して、私がどうしても納得できないのは、死んだ後に残る家族に迷惑をかけるないように片付けを親に強制するような風潮です。どうしたら親に片付けさせることができるかといった記事を見ると吐き気さえ覚

▼ここ数年、「片付け」が脚光を浴び続けています。始まりは、「片付けの達人」を名乗る女性が本を出版し、これがテレビなどでも取り上げられて一躍人気者になったことでした。実際に足の踏み場のないような現場を見事にきれいにしてしまう様が、ショーとして人気を集めたのです。彼女が提唱する「片付け」の理論にはなるほどと思わせる内容が多々含まれており、その実践の潔さが歓迎さ

えます。同居する家族や隣人への配慮は必要ですが、そうした逸脱さえしなければ散らかすことも自由であり、神聖な権利です。

▼高齢になり、自らの死を考えるようになるにしたがって、自分のいなくなつた後に残される人たちに迷惑をかけないようにしたいと考える人もいるでしょう。自分にとって大切なものでも、他人にとつては何の価値もないことは往々にしてあります。しかし、他人にはガラクタでも自らが必要とするものに囲まれて死を迎える権利はすべての人にあります。

▼死後に遺産を引き継ぐ子供たちが、親に向かって不要なものは処分しておけとうるさく迫ることは、金目のものはもらいたい、そうでないものは捨ててから死ねということ

す。荷物がたくさんすぎて手に余り、取捨選択などしたくないならば、お金さえを払えば何でもしてくれる業者はいくらでもあります。相続資産の一部でそれを払えばいい。

▼「片付け」を時間の浪費に過ぎないと考える人には、リディア・フレムの「親の家を片付けながら」を一読することをお勧めします。「片付けをするあいだ、あらゆる感情が自分のなかでせめぎあうだろう」「たとえつらくてもこの悲劇を無理にでも味わうことが、心を浄化し、親とのしこりを消すことになる」。全ての人がこうした機会を与えられるわけではありません。しかし、まっとうな人間なら、「片付け」の機会こそが貴重な遺産のひとつであることに気づくはず